

平成 30 年 5 月 31 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(B) (海外学術調査)

研究期間：2014～2017

課題番号：26300026

研究課題名(和文) マヤ文明の王権発展過程の研究

研究課題名(英文) Study of the development process of kingship in Maya civilization

研究代表者

中村 誠一 (Nakamura, Seiichi)

金沢大学・国際文化資源学研究中心・教授

研究者番号：10261249

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、古典期マヤ文明の王権の発展過程を文明の中心地であるグアテマラ・ティカル遺跡と、ティカルと同等の1次センターでありマヤ文明圏で最も南東に位置するホンジュラス・コパン遺跡の周縁地域に存在し、コパンの2次センターと考えられるエル・プエンテ遺跡の調査研究を通して追求するものである。

両遺跡ともに、与えられた資金の範囲内で可能な発掘調査を実施し、王権成立後の文明の発展過程において中心から周縁センターへのエリート層の移民が重要であったことを示すデータと同時に、エル・プエンテにおいては周縁センターの独自性を示すデータも得られ、両地域の相互関係の解明に大きな示唆を与え次期研究計画へつながった。

研究成果の概要(英文)： This research focuses on Tikal Ruins of Guatemala which is the center of Classic Maya Civilization and El Puente archaeological site of Honduras which is the peripheral secondary center of Copan in the Southeast Maya Area. The objective of the research is to elucidate the development process of rulership of Classic Maya Civilization both in the Center and also in the Periphery.

Within the limit of the amount of funds given for four years (2014-2017), the excavation in each site was conducted. The important data concerning the elite immigrations from the center to the peripheral sites as well as uniqueness of the peripheral center such as El Puente were gained. This leads to the preparation of the next step of Type A research from 2018.

研究分野：考古学

キーワード：マヤ文明 王権 ティカル遺跡 エル・プエンテ遺跡 コパン遺跡

## 1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、長年マヤ文明の調査研究に従事しているが、2005年から国際交流基金など別プログラムの派遣事業により、グアテマラへ渡航し、ティカル遺跡等で行うことのできる学術調査に関して、計画を練ってきた。マヤ文明の中心地であるティカル遺跡の北のアクロポリスでは、1956年から1969年まで続いたアメリカのペンシルバニア大学調査団による大規模調査以来、半世紀近くにわたって考古学調査が行われてこなかったが、古典期マヤ文明の起源や王権の発展過程の問題を研究しようとした場合、その基礎データを産出したティカル遺跡北のアクロポリスでの調査再開が望まれていた。

研究代表者の提案を受けた金沢大学は、ティカル国立公園を管轄するグアテマラ文化スポーツ省文化自然遺産副省と2011年に交流協定やプロジェクト実施に関する覚書を締結した。これを受けて、2012年に金沢大学はティカル国立公園内に調査研究拠点としてのリエゾンオフィスを設置し、プロジェクト開始の準備を行ってきた。一方、ティカルでは、2005年から2006年にかけて研究代表者が日本政府へ提案した文化無償資金協力が2009年頃から動き始め、2012年に文化遺産保存研究センターが建設された。こういった一連の流れの中でティカルにおける調査を中心として本科学研究費補助金による海外学術調査が2014年度に採択され、現地での調査研究が可能となった。

## 2. 研究の目的

マヤ文明の最盛期である古典期と呼ばれる時代の王権の発展過程を文明の中心地であるティカルの、特に北のアクロポリスでの調査研究と、文明の最周縁に位置するホンジュラスのエル・プエンテ遺跡での調査研究により、中心と周縁を対比させる形で追求しようとした。ティカルに加えてホンジュラスのエル・プエンテ遺跡を選定したのは、ここでは研究代表者が1990年代に考古学プロジェクトを指揮した経歴があったからであり、本科研費研究の研究分担者がその後も、断続的にエル・プエンテ遺跡で調査研究を継続していたからである。

## 3. 研究の方法

ティカル遺跡、エル・プエンテ遺跡ともに現地での発掘調査研究を主体とした。両遺跡ともにその国を代表する文化遺産であると同時に、特にティカルの場合は世界遺産でもある。そのため、発掘遺物等は現地での整理・分析・研究が基本とされ、一部の理化学分析用の資料を除けば、国外への持ち出しが

禁止されていたため、基本的に現地で調査研究を実施する方法をとった。

研究においては、特に放射性炭素年代測定や安定同位体の分析など理化学的な手法を導入して文理融合研究を推し進めた。

## 4. 研究成果

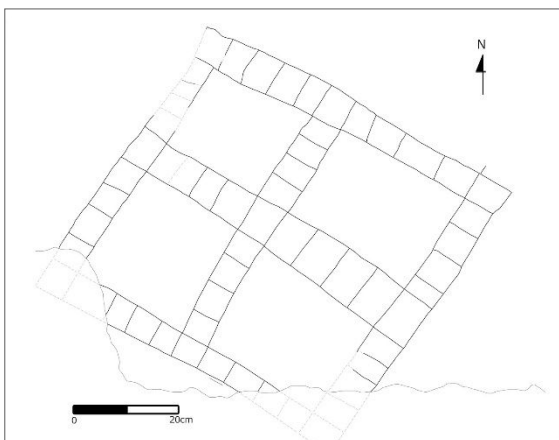
### 【ティカル】

ティカルにおける発掘調査では、ペンシルバニア・ティカル・プロジェクト(PTP)で発掘されていない北のアクロポリス北東部を調査対象地として選定した。発掘調査は、全く未調査の区域でPTPが報告している編年や北のアクロポリスの発展過程について再確認するとともに、良好な基礎的考古資料を獲得することを現場の目的として掲げた。発掘調査においては、プラットフォーム二段目に発掘溝300-Aを、最下層の一段目に発掘溝300-Bを設定して調査を開始した。最初の発掘面積はいずれも2m×2mのピット形とし必要に応じて拡張することにした。最初の発掘溝は、二段目のプラットフォーム上に設置され深く掘り下げる形で発掘が行われた。

PTPの報告書[Coe 1990]によれば、このプラットフォームの祖型が建設されるのは、早ければ北のアクロポリスのタイムスパン12の時期とみられ紀元前1世紀頃に比定される。現在と似た形になったのは、タイムスパン8の時期とみられ紀元後190~325年頃である[Loten 2001:235-244]。我々の発掘では、そのほとんどが石灰や、小石と石灰を交互に版築しながら敷いていく4.5m以上の高さ(高さ)をもつ盛り土層が確認された。二段目のプラットフォームの原型と思われる。出土土器は、その大多数がカウアック期(紀元後1~150年頃)に属するものの、わずかながらキミ期(紀元後150~250年頃)、マニック期(紀元後250~550年頃)の標識土器も確認された。この巨大なサブ・プラットフォームの建設時期は、マニック期の初め頃と想定される。

地表下5m程度を掘り下げれば岩盤にあたると考えた筆者の事前の見通しが甘く、この発掘溝は、当初設定された発掘面積(2m×2m)を守ったまま深く掘り下げられたので、詰め土をその中に入れて固める枠型補強壁の一部が出土したり、サブ・プラットフォームと関係する破壊された建造物の一部か、何らかの遺構が深い地点で出土したりしたため、掘り下げが困難となり地表下7.7mの地点で中断せざるを得なかった。しかしながら、依然としてカウアック期の土器が出土しており、その一部はチュエン期(紀元前350~紀元後1年)のものであるかもしれない。こうしたことから、地表面から10m以上といったより深い掘り下げ発掘が必要であり、より広範な初期発掘面積を確保することが必要とされることがわかった。

一段目のプラットフォームに設定された発掘溝 300-B においては、発掘溝の地表面から 40 センチ下のところに保存状態の良い漆喰の床面が確認された。北側部分の一部を残して南側半分を切り下げはじめた時に漆喰の床面上に線が刻まれていることに気づき 300-C 以下、発掘区域を拡張し漆喰の床面を精査したところ保存状態の良好な「パトリ」が発見された。パトリの機能に関しては、単なるゲームであるという説から 57 マスのうち 52 マスを使ってゲームが行われたとし暦と関連させた占いも兼ねていたという説、球技と同じように豊穡儀礼も兼ねて遊ばれていたという説など様々な考えがあるが、古代におけるパトリはより複雑で多様な用途を持っていたと考えられる。今回の発見事例は、北のアクロポリス北東端の最下層プラットフォームのオープンスペースに刻まれていた。アクロポリス北東部での発掘調査成果は、これまでの PTP による発掘調査によって報告されていた北のアクロポリスの王権初期による重要性を追認するものとなった。我々の調査で確認された遺構や盛り土の厚さを考えると、これだけの土木工事を指揮できるティカルにおける王権初期の強大な権力の存在が示唆されている。



科研費調査でティカル北のアクロポリス内で半世紀ぶりに発見された新しい「パトリ」(日本のマスコミ等でも報道された)

#### 【エル・プエンテ】

エル・プエンテ遺跡は、ホンジュラス共和国西部コパン県ラ・ヒグア市に位置している。チャメレコン川の支流であるチナミート川右岸に占地し、標高は約 450 メートル前後、フロリダ谷内で確認されたカテゴリー5 (地方センター) 遺跡の一つである。同遺跡は、1992 年から青年海外協力隊によるラ・エントラダ考古学プロジェクト第 2 フェーズによる建造物 1, 3, 4, 5, 10, 26, 31 が調査修復され、1994 年 1 月には国立遺跡公園として開園した。その調査を通じて、エル・プエンテ遺跡はその最盛期、つまり、古典期には東南マヤ地域最大の都市遺跡であるコパン遺跡の強い影響下にあったことが出土遺物や

建築様式から明らかになった。しかし、その成立時期、最終的な存続年代については、不明な点が残り、ラ・エントラダ考古学プロジェクト第 2 フェーズ終了後も中村誠一、寺崎秀一郎によって、調査研究が継続されてきた。周辺遺跡、特に同じフロリダ谷に位置するエル・アブラ遺跡の調査成果とエル・プエンテ遺跡建造物 1 最下層の様相から、少なくともこれらの遺跡においては、古典期中期後半に成立し、急激な発展を遂げ、古典期後期には放棄されたと考えられ、その存続期間はおそらくラ・ベンタ谷のロス・イゴス遺跡などに比べると短期間に終わったことは確実である。その急激な発展と廃棄の背景には同時期のコパン政体との関係を明らかにする必要がある。

たとえば、エル・アブラ遺跡の場合、コパン王朝第 16 代王ヤシュ・パサフから贈られたアラバスター製容器の発見や豊富な石彫類などの文字記録や図像解釈学によるアプローチも可能であるが、同地域最大のピラミッド型建造物を擁するエル・プエンテ遺跡はその遺跡の規模とは裏腹に貧弱な石彫類、テキストの欠落など、コパン政体との繋がり、あるいは、政治的経済的関係をうかがわせる資料が必ずしも十分ではない。そこで、本研究では、エル・プエンテ遺跡のローカルな支配者層に注目し、そこからコパン政体との関係についてアプローチを試みるための考古学的データを獲得することで科研費研究のテーマを追求した。具体的な発掘調査は、建造物 6 を中心として行われた。

建造物 6 はエル・プエンテ遺跡中心グループにおいて、プラサ A の西端に位置する (図 2)。同プラサの東端は、ラ・エントラダ地域でもっとも高いピラミッド型建造物である建造物 1 が配置しており、これらの位置関係から、エル・プエンテ遺跡中心グループ内における建造物 6 の重要性がうかがえる。建造物 6 に隣接する建造物 4, 5 はすでに調査・修復されており、居住用の建造物と推定されている。建造物 6 と建造物 4, 5 の大きな違いは、建造物 6 だけが荒石積みの上部構造をもつことである。建造物 4, 5 の場合、発掘調査時にバハレケが検出されているが、ボベダは確認されていない。このことから、ある程度の高さ (現在の保存修復されたレベル+) まで石積みの壁体を立ち上げ、その上にバハレケによる壁と植物性の素材を用いた屋根を設けていたと考えられる。一方、建造物 6 は 2003, 2004 年におこなった上部構造の発掘調査により、ボベダをはじめ、石積みの屋根構造を擁していたこと、上部構造内部の残存状態が極めて良好であることが確認されている。上部構造内は三室からなり、中央のベンチはほぼ完全な状態で検出され、その規模からもエル・プエンテ遺跡内最大である。このような立地、上部構造の状態から、建造物 6 は、エル・プエンテ遺跡の支配者層の居住用マウンドと推定された。本研究では、

この建造物 6 の全体像を明らかにするため、基壇部分を中心に発掘・修復をおこなった。

エル・プエンテ遺跡、とりわけ、建造物 6 の調査から見えてくるローカル・エリートについて、以下のような知見が得られた。まず、全体的な建築様式そのものは東南マヤ地域の伝統から著しく逸脱するものではないが、サイト・プランという点に着目すると、中心グループの方位軸がコパン遺跡他で重視される南北ラインではなく、東西軸が重視されている。これは地形的な制約によるものとは考えにくい。エル・プエンテ遺跡の起源に関わる特異性を反映しているのだろうか。一方で、徹底したテキストや図像学的資料の欠如は、それらに象徴される「知」へのアクセス権にローカル・エリートには差異があったことを示しているのかもしれない。エル・プエンテ遺跡の場合、かつて、建造物 1 内で発見された人物像型香炉に代表されるように全体の構成としては、コパン王権との強い類似性が指摘されるものの、細部を検証すれば、そこには異質なローカル性が看取される資料が存在する。今回、建造物 6 で発見された「水盤」もまた“ローカル性”が具現化したものと考えられる。コパン遺跡から北東に焼く 60km 離れた、ラ・エントラダ地域がコパン政体との関係をもっていたことは出土遺物などの点からも明らかであるが、ローカル・センターは中心 = コパン政体の相同ではなく、ローカル性が維持されている点は興味深く、中央の権威が周縁に対して浸透、あるいは受容されていくプロセスの指標としての有効性について、改めて検証されるべきであろう。

#### 【その他】

両遺跡における発掘調査と並行して行われた人骨からの安定同位体抽出とその分析により、両遺跡ともに外部地域からのエリート層の移民が頻繁におこっていたことが明らかとなった。この新たな知見は、マヤ学界でも注目されるところとなり、国際的な共同研究へ発展しているが、古典期マヤ文明の王権初期、特にその発展過程における移民の役割について、新たな研究テーマが浮上することになった。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 12 件)

1. 寺崎秀一郎・中村誠一「ホンジュラス世界遺産コパンのマヤ遺跡におけるデジタル三次元測量と GPR 調査の成果と課題」『3D考古学の再挑戦 - 遺跡・遺構の非破壊調査研究 - 』。29~36 頁。2017 年 10 月。早稲田大学総合研究機構。査読無。

2. 中村誠一「グアテマラ、ティカル遺跡における 2015 年度の発掘調査」『古代アメリカ』第 19 号。105~118 頁。2016 年。査読有。

3. 中村誠一「金沢大学によるティカルプロジェクト概要報告 (2012~2015)」『古代アメリカ』第 18 号。79~94 頁。2015 年。査読有。

〔学会発表〕(計 20 件)

1. 中村誠一「コパン王朝創始期の再検討 - コパンにおける日本の考古学プロジェクトの新しい発見と解釈 - 」、会議名：第 2 回金沢マヤシンポジウム。2017 年 11 月 15 日。京都文化博物館。

2. 中村誠一「ホンジュラス、コパンのマヤ遺跡における発掘調査 - 2016 年度の概要紹介 - 」、会議名：古代アメリカ学会第 21 回研究大会。2016 年 12 月 3 日。国立民族学博物館。

〔図書〕(計 4 件)

1. 『金沢大学 文化資源学研究 第 17 号』中村誠一編・著、金沢大学国際文化資源学研究センター、1~113 頁。2017 年。

2. 『金沢大学 文化資源学研究 第 16 号』中村誠一編、市川彰、村野正景、鈴木真太郎、中村誠一・半田高広著、金沢大学国際文化資源学研究センター、1~153 頁。2016 年。

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況 (計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中村 誠一 (NAKAMURA, Seiichi)  
金沢大学・国際文化資源学研究センター・教授  
研究者番号：10261249

(2) 研究分担者

寺崎 秀一郎 (TERASAKI, Shuichiro)  
早稲田大学・文学学術院・教授  
研究者番号：90287946